
ある悪女の純愛劇

赤いトマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある悪女の純愛劇

【Nコード】

N4067Y

【作者名】

赤いトマト

【あらすじ】

他人を優先する性格のヒロインは決まってみんなに愛される。私はそれとは真逆、自分のためにしか生きられない悪女だった。そのことを後悔したことはないけれど。そんな女が異世界にトリップして、性格の悪さを発揮中。私が私らしく生きられるなら政略結婚でも何でも出来る、な主人公が愛に目覚めるまでの話。後々甘くなる予定。

01 悪女と名乗る女の本音（前書き）

書き直しました。

申し訳ありません。

01 悪女と名乗る女の本音

本当はシンデレラになりたかった。

魔法使いに助けられ、白馬が似合う王子様に見初められる。

そんな夢みたいな話を心のどこかで信じていたのだ。

けれど現実はその理想と間逆、我ながらろくでなしと罵られても仕方のない女だった。

確かに他人のために生きる人生は素晴らしい。自己犠牲、他人主義、自分の身を投げ打ってまで他人に尽くす様は私も美しいと思う。そういう人達がどこかにいるおかげで世の中が成り立っているのも事実だ。どうぞどうぞ気が済むまでやってくれ。だが私はそうやって生きるのは真っ平御免である。

私は自分の欲望に忠実に生きることを選んだ。

所謂悪女みたいな生き方だ。阿婆擦れ、妖婦、なんと呼んでくれたって構わない。どうせ同じ意味である。

ただ、一つだけ言っておきたいのは誰にでも股を開いていたわけではない。

私は私のためだけに生きていた。自分にとって不利益なことは絶対にしたくなかったのだ。

それなりの貞操観念を持っていた私は、女の武器であるその代わり自分の容姿を磨くことにした。異性は勿論同姓も、見た目麗し

い人間には口だけでも案外絆されてくれるものである。

世の中は所詮顔。第一に顔。女は可愛ければ可愛いほど良い。

性格なんて演じきつてしまえば素の性格なんてばれやしない。そう分かった私は多大な金と手間を自分の容姿に費やした。遣伝子によってもたらされる差は大きいものだけれど、努力をすればそれなりの容姿を手に入れることが出来る。

周りに脇目も振らず自分を極めてきたおかげで、私は自他共に認めるほど可愛かった。

一般的には悪女と言われると私は赤いワンピースの似合う色気ムンムンの大人の女性を思い浮かべるが、私の顔は世間で言う清纯系の顔。

赤いルージュよりも薄ピンクのグロスが、大輪の薔薇よりも密やかに咲くコスモスが似合いそうな顔の女を、誰が悪女だと思うのか。少なくとも私に引っかけた男達はそう思っではいなかった。

私は私に擦り寄ってくる男をこれっぽっちも愛してはいなかったけれど、性格の悪さが露見することだけは絶対にしない。私は完璧主義者である。

彼等の理想の女の子像を一時も崩すことがなかった私に、貢いでくれる男達は誑かされていることなんて気づきもしなかっただろう。ほら、私、見た目清纯だから。

あることを証明するのは簡単だが、ないことを証明するのは非常に困難である。もっと言えば私の腹のうちなど、私がへまをしない限り誰も知ることは出来やしない。

良心の呵責など今更あったものじゃない。そんなもの腹の足しにもならない。

私は自分の欲望のため彼等を誑かし続けた。

そんなこんなで過ごしてきた二十数年。後ろから刺されるようなことをしている自覚はあるが、今まで五体満足で生きてこられたのは私には悪運でもあったからなんだろう。

決して同性への配慮も怠らなかつたため、人間関係も言うほど悪くなかつた。

良くも悪くも私は上手く擬態出来ていた。

私の本音を知る人間など、結局最後の最後までいなかつたのだから。

綺麗な姿で王子様のハートを射止めたシンデレラ。

射止めた人数こそ違うだろうけど、やっていることは一緒である。

所詮王子様も面喰いなのだ。

ドラマチックな夢物語に憧れてていたことなど、とっくの昔に忘れていた。

02 悪女が異世界に落とされる(前書き)

付け足しました。

02 悪女が異世界に落とされる

碌な生き方をしてこなかった私は、死んだらきつと地獄に行くんだろつとそう思ってた。

これが私の地獄なのか。いや、地獄だ。

死んだ覚えはないが、一足先に地獄にお邪魔してしまったらしい。

見知らぬ部屋。如何にも高そうな家具や装飾品が置かれているその部屋は、明らかに自分の部屋ではなかった。

まるで御伽噺に出てくるお姫様の部屋みたいだ。子どもの頃の私であつたら喜んだだろう。

部屋を見回す私の視線はドン、と置かれたドレッサーで止まった。

「……………なにこれ!!」

そして絶叫する。

ドレッサーの鏡には苦勞と金を惜しげもなくつぎ込んだ私の唯一の誇りと言ってもいい姿がそこに映っていなかったのだから。

その代わりに見るも無残な女がこっちを見つめかえしていた。

肌が白くなったのは嬉しいが、一步間違えれば死人にも見えるんじゃないかと思うほどの病的な白さ。

一ヶ月に一回は美容院に行って色と長さを整えていた茶髪のウエー

ブは、黒に近い青色をした何の手入れもされていないただ長いだけの髪になっていた。

私の努力の結晶何処に行った。

自分の姿が変わってしまうという異常事態よりも何よりも、私が手入れてきた美貌がなくなった事実が何より精神的ダメージを私に与える。

よるよると米神を押さえながら私はその場に座りこんだ。本当、なんだこの状況。

「……おお！！アリシア！目を覚ましたのか！」

いつの間にか入ってきたのかは知らないけれど、私以外居なかったはずの部屋に違う人間の声が響いて私はゆっくりと顔を上げる。声が出たほうには「私が偉い人です」と言わんばかりの大層な服を着た初老の男がこちらを見てにこやかに笑っていた。

「……誰ですか？」

私が訝しげに声を出せば、その男は困ったように眉を下げて「いくら抜け殻だったとはいえ、娘にそう言われるのは悲しいな。」と咳く。その言葉に私はハツとして男と視線を合わせた。

聞き捨てならない言葉が聞こえたような気がする。

「娘？誰が？」

「お前がだ、アリシア。」

「……私アリシアって名前じゃありませんけど。」

かみ合うことがない会話に私は口元を引きつらせた。

私の親は仕事で家に帰ってこない父親と男と遊んでこれまた家に帰ってこない母親だと記憶している。まあそんな二人も私が学生だった頃に死んだけど。

しかもアリシアってどう考えてもヨーロッパとか、そっち方面の名前。生粋の日本人としては横文字の名前はむず痒い。

そんな私の思いに気づいたのが気づいてないのか、男はわざとらしい咳払いをした。

「色々と混乱はあると思うが聞いて欲しい、ここは今までお前が居た世界ではない。」

駄目だ、この人本格的に頭が可笑しい。

しかし本音をそのまま曝してしまふのは悪女として培ってきた建前が邪魔をしたのか「はあ、」と気の抜けた返事をするだけに留まった。

「余の名前はアラン・バルト・クラーク。この国、クラーク国の王であり、今のお前の身体の父親でもある。」

威厳たっぷり吐かれた自己紹介。今の私の気持ちを言うとすれば

「どうやら電波属性だったらしい、このおっさん」である。痛々しい。まだ私に色目を使ってくる色ボケ親父の方が扱いやすいだろう。そう思っただけの前の恥ずかしいおっさんをまじまじと見た。

……そういえば男の青みがかつた色は、さっき鏡を覗いたときに見えた（私とは断じて思いたくないが）私の変わってしまった髪色と一緒にだということに気づく。

何も言わない私を労しげに見て、男は言葉を続けた。

「その身体はな、生まれつき魂が入っておらず死んでしまっただけだ。」「

男曰く、その身体をなんとか男の魔法で今まで成長させ続けていたらしい。

そして違う世界でこの身体に入る予定であった魂を見つけ、今回この身体に戻すことが出来たそうだ。

これほど自身の魔力を使ったことはない、としみじみと語る男に私は目を点にするしかなかった。

頭がついていかない。

突っ込みどころがありすぎて、突っ込みきれない、というのが正確な表現である。

どういふ風に振舞えば男が落ちるだとか、何処にお金をかければ綺麗になれるかだけを考えてきた頭には容量を遥かに超えた内容だ。

これは、どういう反応すればいいのだろうか。純情を気取ってさめざめと泣いてみるか、それとも、冷静に対応して成り行きに任せるか、迷うところであった。

「それは…どうも、ありがとうございます。」

私は後者にすることにした。ここで泣いてみてもこの異常事態から抜け出せるわけでもない。女の涙はここぞというときに使うものだ。それに泣くのにだって体力がいる。何の利益ももたらさない涙は流したくなかった。

自分としては出来の悪い反応だったが、王を名乗る男はそれに満足したのか、うんうん、と嬉しそうに頷く。

そして、手を叩き数名のメイド服を着た女達を呼び出した。

「お前の世話をさせる侍女達だ。」

視線を向けられた女達は恭しく頭を下げる。

見た感じ歳はバラバラであったが、中には男よりも年上だろう人も居た。

侍女、なんて言葉、普通日常会話に出てくることなんてないだろう。この状況を認めただけではないが、少なくとも目の前に居る男の位が高いことだけは分かった。そういうのだけは目敏く反応するのである。

「今日は疲れているであろう。詳しいことはまた明日、宰相の方が

ら聞くといい。」

そう言つて男が出て行くと残されたのは私と侍女と呼ばれたメイド服の人達。何時までも床に座り込んでいる私を立たせ、私に向かって全員頭を下げた。

「初めまして、アリシア様。私達がこれから身の回りのお世話をさせていただきます。」

「……ありがとうございます。」

「恐れ多い言葉、恐縮でございます。」

私も頭を下げるべきか悩んで、やめた。どう考えてもこの人達真剣にやつてる。

どうやら本気で私の世話をする気のようにだ。

やっかいなことになった。

大きなため息を吐いて、私は侍女達と向き合った。

私名前を聞くと、敬語と姿勢を崩すことなく私から見て左側から順番に挨拶をしていく。

先ほどアランと名乗った男より歳をとったメイド、いや侍女の名前が「マリー」ということ以外は覚えられなかったけれど。

「貴方達は先ほどの方から説明は受けているんですか？」

「ええ。アリシア様のことはずっと伺っております。」

マリーが無機質な声で返す。

なるほど、一番偉いのだろう。周りの侍女は静かにこちらを見ているだけだった。

「そう、ですか。」

「アリシア様、明日、宰相であるフィリップ様がいらっしゃいますわ。そのときに全てをお聞きになられるかと。」

そういえばそんなことをアランは言っていた。それにのせられる訳ではないが、宰相に話を聞いたほうが具体的なことを聞けそうだ。男だったらもつといい。

そこまで考えて自分の容姿を思い出した。

鏡に映った幽霊のような自分。

苦虫を噛み潰したように顔が歪むのが分かる。

とりあえず、これが夢じゃなかったら身なりを整えることから始めよう、そうしよう。

02 悪女が異世界に落とされる(後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。

ご期待に沿えることが出来るかわかりませんが、お付き合いくださると嬉しいです。

03 悪女の状況把握

目が覚める。窓から入ってくる太陽の光がダイレクトに顔に当たって眩しい。

瞼を開け見えたのはベッドに付けられたシフォン生地の手蓋だった。私にこんな乙女趣味はない。

ということとは、まだ私はあの姿なのか。

気が重くなるのを感じながら上半身を起こしドアの方を見た。

昨日紹介を受けたマリーともう一人、侍女が立っている。

「おはようございます。アリシア様。」

「……おはようございます。」

「仕度をしましょう、直にフィリップ様がお見えになれますよ。」

マリーがそう言って持ち出してきたのはコルセットと淡い水色のドレス。それに私は口を引きつらせた。あれを着るのか。

確かに豪華なものは嫌いじゃない。むしろ大好きだ。

高そうな布も、キラキラと光る宝石も、前の自分であつたら喜んで身に着けただろう。

だが、それは私がそれに似合うと思っていたからである。

上質なものを着るのは可愛くなる上で必要だけれど、だからって自分の似合わないもの着るのは傍から見てもかなり、見苦しい。

可愛くなるどころか逆効果である。着るものに着られては綺麗な洋

服もアクセサリーも台無しだ。

コルセットを身に付けられている間、私は憂鬱だった。

自分を姿を見ないように鏡を見ないでいたのだけれど、化粧をするから、とドレッサーの前に座らされると、私は食い入るように鏡を見つめた。

「如何なさいました？アリシア様。」

「……案外悪くないかもしれない。」

後ろで侍女の二人が顔を見合わせるのが鏡越しに見えたけれど、そんなことを気にしている場合じゃない。

どうやら私に与えられた地獄は思った以上に甘かったらしい。

その事実には私は密やかに笑みを零した。効果音をつけるとしたら「にやり」だ。

「鋏を持ってきてください。」

侍女達に向かってそういえば、二人は首を傾げながらも早速鋏を持ってきた。

「初めまして、宰相を勤めさせていただいているフィリップと申します。」

仕度してから間も無く、何度も名前を聞いた宰相が私の部屋に現れた。見た目は30代後半ぐらいで、鮮やかな青色の髪を後ろで束ねている。

染めた時に出る変な光沢はなく、その青色が地毛であることが分かった。

見た目麗しい、のだろうか。

クラーク国の人間はヨーロッパ系の顔立ちをしていてあまり違いが分からないのが正直なところだ。

「初めまして、アリシアと呼ばれています。」

「アリシア様、…その、随分と雰囲気がお変わりになられて。」

フィリップが控えめに言った言葉に私は笑みを浮かべた。それもそうだろう。

長いだけだった髪を肩より少し長いところでバッサリ切り、顔色の悪かった肌の色をファンデーションで隠している。それだけでも充分見れる顔になったと思う。

成長だけ促されていたというこの身体は何の手入れもされていなかった。

必要最低限の栄養だけで育ったためか腕や足はごぼつみただし、頬は痩せこけている。

それに髪の毛は梳かれたことが無かったようで絡まったまま、伸ばし放題。

そりゃ最初見たときは化け物みたいだと思ったわけだ。

ただ一つ、救いだっただのは元はあまり悪くないということ。

いや、飛びぬけて良いわけではない。お世辞でも美少女とは言えないけど、不細工と罵られるほどではなかった。

これから時間をかけて変えていけばいい。心の中でほくそ笑む。

「ええ、どうでしょうか？」

「とてもお綺麗ですよ。王妃そっくりです。」

「……そのことですけど……」

そう言っただけ言葉を切れば、フィリップは「お話します。」と至極真面目な顔でこちらを見た。

「アリシア様の御身体についてはお聞きになりましたか？」

「……はい。なんでも魔法で成長させていたと。」

「その通りでございます。」

魔法なんて胡散臭い、そんな風に言っただつもりなのにフィリップは

当然のように肯定を返してくる。

「アリシア様がいらっしやった世界では分かりませんが、こちらでは魔法という技術が発達しております。…まあ、扱えるのは魔力を持った人間だけです。そして今回、長らく魔法で生き続けたアリシア様の身体に魂を呼び戻すことが決まったのです。」

あらかじめ用意していたようにぺらぺらとフィリップの口から出てくる言葉。

きつと聞かれることは大体分かっていたのだろう、私が口を挟む隙がなかった。喋り終えたフィリップは質問は？とでもいうように私に視線を向ける。

「貴女がこちらに來た経緯はご理解いただけましたか？」

「まあ、大体。でもなぜこの時期に？話を聞いてると、別にもっと早くてもよかったですんじゃないですか。」

「本当は別世界でのアリシア様の死を待つ予定でした。別世界と時間の流れが違うのであちらで長生きされても充分間に合はずだったのですが、そういかなくなりまして…。」

何が、といわれなくても分かった。

これくらいの歳の娘がすることなんて限られている。

「結婚、ですか。」

「その通りでございます。」

申し訳ありません、こちらに帰ってきてくださったばかりなのに。そう言っ眉を八の字にするフィリップとは反対に私は内心かなり

はしゃいでいた。

「相手は？」

気持ちを隠くこともせず弾んだ声でそう聞けばフィリップは困惑の表情を浮かべながらも答える。

「ルワーナ帝国、いや、クラーク国の隣の帝国の第二皇子である、エドウィン様でございます。」

「それはまあなんとというか優良物件で。」

「……はい？」

「ああ、お気になさらず。」

第二皇子と言ってもその地位はかなり高いものだろう。そんな人がなぜ今まで動くこともなかったアリシアと結婚することになったのか聞いてみると、「他にこの国に王女が残っていないから」だそうだ。

「あの、お怒りではないのですか？」

「何故ですか？」

「…その、女性というのは好いた男と一緒にになりたいと思うのでは…。」

気まずそうに申し出たフィリップは「それに向こうにもそういう人がいたのではないのですか？」と続ける。

まあ、そういう人が居なかったわけではないけど、愛は無かった。

（向こうからの愛はひしひしと感じたが。）

私が私のために生きていけるようにしてくれるなら男でも女でも、

たとえ別世界でも変わりはない。

その絶好の相手を用意してくれているというのに何故怒る必要があるのだろう。

私を心配していつてくれた言葉なのだろうが、生憎今の私には必要がない。

「フィリップさんありがとうございます、心配ないですよ。」

私が笑みを浮かべればフィリップは納得のいかなそうな顔をしながらも頷いた。

04 悪女が動き出す(前書き)

アクセス、お気に入り登録ありがとうございます。
皆様に楽しんでいただけるよう頑張ります。

04 悪女が動き出す

「それで結婚まではどれくらいあるんですか？」

「三カ月後です。」

「それは、思ったより急ですね。」

「はい。それまでにアリシア様にはこの世界の知識とマナーについて覚えていただきたい。」

「……本気ですか？」

「本気です。」

フィリップとの会話を思い出して私は大きなため息を吐いた。

私の目の前には机いっぱいには広げられた分厚い辞書みたいな本の山。本のタイトルから読み取れば、私が今居るクラーク王国、並びにクラーク王家の歴史と、嫁ぎ先のルワーナ帝国についての本ばかりだ。

どうやらアリシアに成り代わる際、私の言語能力はこちらに適應させられたらしい。

へによへによと曲がりくねった文字の意味が習わずとも理解出来た。都合はいいけれど、大量の本を前にしては微妙な心境である。一番上にあった本を手にとり、ぱらぱらと軽く目を通す、本の途中には地図が描かれていた。

「ルワーナ帝国ってクラーク国の何倍の面積なの……」

「約五倍でございます、アリシア様。」

「……早い返しをありがとう、マリー。」

ちんまりと描かれたクラーク国の隣には、今にもそれを取り込んでしまいたいほど巨大なルワーナ帝国。

マリーの言葉に、何故この国がそんなに結婚を急いだのか理解出来た。

娘でも売らないと大きな帝国に飲み込まれてしまっわけだ、この国は。

「そういえばこの国には他に王女が居ないと言っていたけれど、アリシアは、いや、私は一人娘なの？」

私が敬語を使っていないことを気にすることもなく、マリーは「いえ」と首を横に振った。

「アリシア様の上に御二人、王女様がいらっしやいます。」

「その二人は？」

「違う国へと嫁がれました。」

「なるほど。」

まだ見ぬ私の姉達はもう売られた後だったようだ。地図にもう一度目を落とす。

クラーク国というのは微妙な場所に位置している。片側半分をルワーナ帝国と密着させ、もう片方は二つの国に挟まれていた。多分この二つの国に先に生まれた王女達は嫁がされていったのだろう。

そこまで考えてアリシアの父親である王を思い浮かべた。

あの時はそこまで気にしなかったが、自分の魔力を使わずとも魔道師を雇ってアリシアの身体を成長させ続ければいいのに、敢えてそれをしなかった王。

そして一度も口を開いたことが無かった娘の言葉に悲しそうな顔をしていた彼が、娘を国のために他国へ嫁がせたりするだろうか。

「王…父はこの結婚はどう思ってるのか知ってる？」

「最後まで反対しておられましたよ。先の御二人の結婚のおかげで国の財政も安定したので、フィリップ様の案を断りきれなかったようですが。」

ということとは上二人の結婚もフィリップが持ち込んだことだ。

だからあんなに私が快諾しているのに戸惑っていたわけか。王が反対していたことを本人が躊躇なく頷いたのだから。

それから察するにフィリップの発言権はかなり大きいものなのだろう。

王の意思を左右するほど。まあ、どちらが国として正しいのかは明白だが。

「それじゃあ頼みごとをするなら王じゃなくてフィリップを通したほうが早そうね。」

国の財布の紐を握っているのは実質王ではなくフィリップなような気がする。

王女の結婚云々に口出せるのだから相当王から信頼を得ているだろう。そんな彼なら欲しい物も手に入れやすそうだ。

私は手に持っていた本を積み重ねた本の上に置き、代わりにそれらの隣にあつた手鏡を顔の前へと持つてくる。

鏡に映つた顔をじっくりと見てみれば、色こそ違つけれどパーツ一つ一つは私が自分の世界に居たときと変わらないことに気づいた。きつとあつちで手をかけなければこんな感じになつていたんだろう。まあそれに加え今の身体は病気といわれても仕方ないほど痩せ細つているけれど。

「まずはこの容姿をどうにかしなきゃ。」

貰い先は決まっているも同然だが、醜いままでいるのは私のプライドが許さなかつた。それに容姿は出来るだけ整っているほうが何かと役に立つ。

少々お金がかかると思うが、今の私は王女である。それくらい我侭いっても許されるだろう。

後でフィリップのところに行って頼んでみよう、と私は頭の中で計画を立てる。

自分でも悪い顔をしている自覚はあるがこの部屋にはマリーともう一人の侍女しかない。（他の侍女達は部屋の外で仕事をしているらしい。）

「マリー、あとでフィリップのところに行く時間ある？」
「ええ。ですがその前に陛下と王妃にお顔を見せに行ってください。」

その言葉に私は数回瞬きをする。

「……両親ね。」

「御二人とも心配なされていました。」

全くそんな風に聞こえない平坦なマリーの声。そろそろ慣れてきたけれど。

それなら準備をしなくちゃいけないか、と私は腰を上げた。と同時にマリーの後ろに控えていた侍女がクローゼットの中からドレスを選び出す。

「あまり派手なドレスはやめて欲しい、今の顔じゃ似合わないから。」

「畏まりました。」

彼女と話すのはこんなときくらいだ。

マリーがいるから余計喋らなくなっているのかは分からないが、他の侍女は私とあまり喋ろうとはしない。

伊達に私も生きてきたわけじゃないのでその理由もなんとなく察しがついた。

大方今まで魔法で成長させられていた私が不気味でしようがないのだろう。その反応のおかげでそれが当たり前前ではないということがわかったのだけれど。

侍女が手に飾り気の少ないドレスを持ってきたのを見て、私は彼女に向かって微笑んだ。

「ありがとう。」

「え、あの、いえ……」

「ミランダ。」

「あ！……も、申し訳ありません……。」

礼を言われるとは思ってなかったのか（今まで言ってなかったからもあるけれど）慌てふためく侍女に向かってマリーが厳しい声を飛ばす。なるほど、侍女の名前はミランダというらしい。

「いえ、気にしないで。」

さて、そろそろ地盤も固めていこうじゃないか。

ここで生きていくには何よりもまず周りの人間の信用を勝ち取る必要がある。

そう思いながら私は彼女からドレスを受けとった。

04 悪女が動き出す（後書き）

少し書き直しました。

05 ある帝国での会話（前書き）

評価、感想、お気に入り登録、本当にありがとうございます。励み
です！

拙い文章ですが、楽しんでいただけると幸いです。

05 ある帝国での会話

「本当に良かったのか？」

ルワーナ帝国の現皇帝であるセオドアが溜息と共に吐き出した問いかけは、広い謁見の間では響くことなかった。

「何のことでしょうか？」

「分かっているだろう、今回の婚約のことだ。」

その視線の先には、セオドアと同じ茶色の髪をした青年が困ったように笑みを浮かべている。

「今更ですよ。」

「しかし……」

「それに皇帝の御意向ならば、異論はありません。」

セオドアが言葉を続けようとするのを、目の前に立つ青年は強めの口調で遮った。しかしその声は食い下がるセオドアを咎めるというよりは、自分に言い聞かせるためにも聞こえる。

頑なな青年にセオドアは自身が座る玉座に深くもたれ掛かった。

「これは皇帝としてではない。……兄として心配しているんだ。」

そう言うとセオドアの弟である青年は躊躇うように視線を宙へ彷徨させたあと、静かに目を伏せる。ありがとございます、と呟かれた言葉は酷く小さかった。

けれど聞き取ったセオドアはやれやれと肩を竦め、ゆっくり首を横に振る。

私達の関係が兄弟から皇帝と家臣になったのは何時のことだったか。少なくとも、幼い頃はもつと穏やかであったように思う。

側室を設けることがなかった前皇帝は、セオドアや青年の母親である皇妃を愛していた。皇帝の愛は執着に近かったが、皇妃がそれに対して満更でもなかったように見えた。そんな二人をセオドアは快く思っていたし、それはきつと目の前の弟も同じことを思っていたはずだ。

全てが崩れ出したのは、皇妃が病に倒れたときだろう。

原因の分からない病は皇妃をみるみる蝕んでゆき、あっという間に彼女を死に追いやった。

それを期に父親は息子達に厳しくなり、やがて皇帝になることが決まっていたセオドアと、まだ10にも満たなかった弟との扱いの差別化が始まったのだ。

最新の頃はそれでも仲良くしていたのだが、母親の後を追うように父親が亡くなって皇帝の座をセオドアが継ぐときにはもう、事務的な会話しかしていなかったような気がする。

こんな風に話すのも久しぶりだ。

話題が見当たらないことに焦ったセオドアは思い出したかのように声を出した。

「そういえば、騎士団副団長になったそうだな。」
「はい。団長から直々に。」

突然の話題に青年は内心首を傾げるものの、こくり、と頷く。実際のことを言えば騎士団副団長に選ばれたのは結構前の出来事なのだが、青年はそのことを口に出さなかった。

「副団長にもなれば鎮庄の際、必ず連れていってもらえるのでとても光栄です。」

何となしに言われた青年の言葉に緩まりかけていたセオドアの口元がピタリと固まる。

「……そこなのか？」
「え？ああ、はい。」

本気でそう思っている様子の青年にセオドアは頭を抱えずにはいられなかった。

どうも自分の弟は自分の価値が分かっていないらしい。

副団長だからといって、鎮庄に赴かなくてはならないという規則はない。

それに彼が背負う地位を考えれば死ぬ危険性がある場所には出来るだけ行かないで欲しいと思うセオドアだが、騎士団入隊する時、皇帝の立場を使っても揺るがなかった青年を思うときつとなにを言っても聞かないだろう。

「何故そんなに生き急ぐ、エドウィン。」

低くそう問えば、エドウィンと呼ばれた青年は薄く笑った。

「兄上が知ることではないですよ。」

では鍛錬がありますので、と広間を出て行こうとするエドウィン
をセオドアは呼び止める。振り返ったエドウィンの顔は影になって表
情が上手く見えない。

「政略結婚だが、妻が出来るんだ。……自分を大切にしろ。」

セオドアの言葉にエドウィンは何も返すことなく、曖昧に微笑ん
ただけであった。

05 ある帝国での会話（後書き）

誤字修正しました。

06 悪女は退屈

異世界に来たというのに、私の生活は慎ましいものであった。

それもそうだろう、今まで男を唆していた時間を全て世界情勢やマナーの勉強に費やしているのだから。

勉強は嫌いなほうではないが、毎日毎日同じことを繰り返している
と流石に飽きてくる。

はあ、とため息を吐くと忙しく私の仕度をしていたミランダがこちらにやってきた。

「アリシア様、少々休憩を入れたら如何でしょう？」

「ミランダ：ありがとう。そうするわ。」

待つてました！と言いたいところをぐつと我慢し、儂げに目を細めて口元を上げれば、ミランダは綺麗な笑顔を私に向けた。少し赤みがかった茶色の髪を揺らし、お茶の用意をし始めるミランダの後姿を見ながら私は満足げな笑みを浮かべる。

私と距離を置いていたミランダは私に心を許してくれたようだ。

これも努力の賜物である。

最初の魂抜けてたお姫様イメージを払拭するために、ここ何日か私は地道な努力を重ねていた。

そのためにさり気なく気遣いの言葉をかけてみたり、この世界を馴染もつとしている健気な王女を演じてみたり。その代わり愚痴を零

さないよう気をつけたり。

そんな姿を一番近くで見っていたミランダは予想通り、私を避けることは無くなった。

むしろ友好的になり、最近では私が何も言わなくてもこうやって休みを挟んでくれる。

計画通り。いや、むしろそれ以上だ。

王女付きになるぐらいだから有能なのは分かっていたのだが、洞察力もすごいらしく、私が何となく疲れた態度を見せればすぐに反応する。マリーもその点は同じなのだが、中々に厳しいので気づいても「もう少し頑張りましょう」という感じでスルーされるため、ミランダの存在はかなり大きかった。

「そういえば、この前陛下達と何をお話になられたのですか？」

ティーカップに紅茶を注ぎいれながらミランダは私に話しかける。この前、というのは私がこの身体の両親に呼ばれて初めて出向いた時の話だろう。それ以来会ってないし。

あっちも執務や貴族達との交流で忙しく、私も勉強やなにやらであまり自由時間が取れない日々を過ごしている。両親という言葉にあまりいい思い出はないし、親と言われてもピンとこないの、会わなくても特別何か思うわけではないが。

「ああ…そうね。……目覚めてよかったといわれたわ。」

言葉を選んで話すミランダは嬉しそうに手を合わせる。

「まあ！それは良かったですね。侍女仲間から聞いたのですが、アリシア様がお目覚めになってから、王妃様の体調も良くなってらっしゃるようで。」

「そうなの？」

「ええ、王妃様が一番アリシア様のことを心配なされてましたから。」

きつとずっと気にかけていらしたのでしょう。微笑むミランダに私は曖昧に言葉を返した。

確かにあの時の王妃、この身体の母親はそれはもう今にも飛び跳ねるんじゃないかというほど喜んでいた。その姿しか知らないけど、どう見ても体調が悪かったように見えなかったように思うのだが。

「アリシア様は王妃様の第一子ですから、余計に。」

「上の二人の姉は王妃の子どもではないの？」

「そうですね。もう随分前に亡くなりましたが、側妃様が産んだ方々でございます。」

さも当然といわんばかりに言われた言葉に私は驚きを隠せなかった。王妃がアリシアという存在を大切にする理由は大方予想がついたのだが、それ以上にあの王に側室がいたことに吃驚する。

今も側室という存在がいるのか聞いてみると、姉二人を産んだ側室が死んだ以来、そういう妾はいないらしい。まあ、様子を見ていたらそんな感じはした。

「それほど王と王妃は仲はいいのかしら。」

私が無意識のうちに呟くと、ミランダは大きく首を立てに振る。

「政略結婚でしたが、御二人共とても仲睦まじくて。きっと、側室を娶りになさらないのも王妃様のことを愛しているからでしょう。」

愛しているから、本当にそうなんだろうか。

こうやって私のことを王直々に生かしてくれていたのだから、それを産んだ王妃を嫌ってはいないと思うけど。

なんだかその裏に様々な事情がありそうである。

けれどそんなことを言ってもミランダは否定すると分かっているの
で、微笑む彼女に「そうね」と頷いて見せた。

「アリシア様が目覚め、ライナス様もすくすく育ちなさって、侍女共は安心しておりますわ。」

「ライナス様？」

「そういえばまだお会いしてませんでしたね。アリシア様の弟君で
ございます。」

へえ、と相槌を打てば、そくだ、とミランダが自身の手を鳴らした。

「ライナス様にお会いしてみても如何でしょうか？きっと、ライナス
様も喜びますわ。」

ミランダの突然の提案に私は目を瞬かせる。まさかそういう流れに

なるとは思っていなかった。

ただ向こうでは兄弟というものがいなかったから、私の兄弟というライナスに興味湧かないわけではない。まあ、あと2ヶ月ちょっとしたらこの国を出て行ってしまふ身なのだけれど。
今更家族の絆だと言えるわけではない私だが、好奇心が勝った。

「そうね、会ってみたいわ。私の弟に。」

06 悪女は退屈（後書き）

ランキングに入っていることに気づきました。
ありがとうございます、皆様のおかげです。

まだまだ勉強不足ですが頑張ります。

何かご指摘あれば遠慮なくお願いします。

07 悪女と弟

弟の部屋だと言われ通された部屋には見覚えのある男が立っていた。

「……フィリップ？」

「おや、アリシア様。」

「この間ぶりね。」

「そうですね……、しかし、お願い事の件については少しお待ちくださるよう申したはずですが……。」

お願い事、というのはこの前フィリップに頼んでおいたことである。

金を一番動かせるのがフィリップだと踏んだ私だったが、返答はこうやって先延ばしにされているのだ。まあ納得はいつていないが、アリシアとして過ごし始めてまだ日が浅い私に、余計なお金を使ってもらえるとは思ってはいない。もう少ししたら本格的にお願いしようとしていたけれど。

フィリップの言葉に私は首を横に振る。

「いえ、そのことではないの。」

弟がいると聞いたのだけれど、と理由を述べればフィリップは目を少し見開く。そして「誰からお聞きしたのですか？」と早口で私に問うた。その様子に私は首を傾げる。そんなに驚かれることを言っただけでもないのだが。

「まあ、風の噂で。」

視線の端で控えていたミランダがこちらを見る。ここで目を合わせたらフィリップは勘付くだろう、フィリップを見たまま笑みを浮かべるだけにしておいた。

そんな大げさな仕草をされた後、本当のことを言うほど私は素直ではない。それにマリーと比べておしゃべりなミランダは貴重な情報源なのだ、フィリップに何か言われておしゃべりを控えられたら私が困る。

「そうですねか…。」

煮え切らない態度のフィリップを訝しげに見る。理由を言わないあたり、何かありそうである。

けれどここで聞いても目の前の男は口を割らないだろう。仕方ないので話を戻すことにした。

「ええ、それで、ここは私の弟の部屋ではないのかしら？」

言外に何故フィリップがここにいるのか聞いてみる。するとフィリップは肯定するように何度か頷いた。その表情は渋いままだっただれど。ここが弟の部屋だということは間違いないらしい。

「私は教育係を請け負わせていただいておりますので先ほどからここで待機しています。」

「そうだったの。それで、弟は？」

「剣術の稽古中でございます。そろそろ戻られると思いますが…。」

いつになるか分からないので一度お部屋に戻らてはいかががでしよう。

そう続けられた言葉に私は眉がピクリ、と動くのを感じた。是非そうしてくれ、とフィリップの目が語っているのが分かる。まるで私と弟のライナスが会おうのを避けようとしているみたいだ。いや、多分そうなのだけれど。そこまでするほどの理由が見つからない。

しかしそんな風に阻まれると逆にそうしたくなるのが人間の性というものだ。

私は無意識のうちに口元に弧を描く。

「弟に会えるというのに時間を惜しむはずがありませんわ。」

「しかしですな……、」

「それとも何か、問題でもあるのかしら？」

頬に手を当て考えるフリをして呟く。チラリ、とフィリップのほうを見れば気まずそうに視線を彷徨わせた。「それはですね、」そうフィリップが言葉を続けようとしたときであった。

カシャン、と金属音が私の後ろから聞こえてきた。

何か金属物を落としたような高い音。突然のことに私は肩をびくつかせ後ろを振り返る。その場に居たフィリップと侍女達の視線もそちらのほうへと向けられた。

金属音の正体は大理石の地面に転がった子ども用の剣だろう。

その隣には10歳いつているかいつていないか微妙な歳くらいの男の子。髪は透き通った水色をしていて、分類分けするならば文句なしに美形だろう。大きな丸い目をいっぱいに広げながらこちらを凝視している。

そしてピンときた。

この子が、アリシアの弟である、ライナスだと。

「……ライナス？」

沈黙を破り、私がその子に声をかける。

するとその子はくしゃりと顔を歪ませて弱弱しく「姉上？」と呟いた。アリシアは私と同じ顔なのに、ライナスの顔は整っていて、そんな顔さえも愛らしい。

まだ声変わりしていない声は小さくてもよく響く。今にも泣きそうな顔は会えて嬉しいから、というわけではないらしい。ライナスの小さな手は微かに震えていた。

「ライナス、よね？どうしたの、」

「姉上はやっぱり僕を恨んでるんですか？」

だからこの部屋まで来たんですか？

声には元気がないのに妙にしっかり話す子どもだと思った。きつとそういう教育を受けてきたんだろう。

しかし、恨むとはどういうことなのか。話の飛躍についていけなくて、フィリップのほうを見る。私の視線を感じ取ったのか、彼は重

苦しく」「ここは王となる者が暮らす部屋なんです。」「と小さく、けれどはっきりとそう言った。

「……ライナスはなんでそう思っているの？」

「僕が王になって、姉上が他の国に行かなくちゃいけなくなったから、」

とぎれとぎれに話された言葉を聞いて、私の中で話が繋がる。

元々この身体は嫁がせるためではなく王位を継承するために残されていたのだらう。側室の子どもではなく、正室の子どもだからという理由で。しかしライナスが生まれたことによって王位は彼に移った。

そのせいでアリシアは政略結婚する羽目になったということか。

「なんだ、そんなことなの。」「

正直、妥当だと思う。

王を継ぐなら女よりも男という固定概念があるし、別に王になりた
いわけじゃない。

というか面倒だ。責任は出来るだけ背負いたくない。むしろ生まれ
てきてくれてありがとぐらいの勢いなのだが。

私があっけらかんとそう言うと、ライナスがぽかんと口を開けた。その拍子で涙が一筋ぼろ、と落ちる。「本当に？」ライナスが確かめるように呟いた言葉に私は「本当よ。」と笑顔で返した。

「姉上は王様になりたくないの？」

「ライナスのほうが好きといい王様になるでしょう？」

「……別の国に行かなくちゃいけないんだよ？」

「あら、心配してくれるのね。ありがとう。」

じゃあ、じゃあ、と次から次へと慌しく聞いてくるライナスに私は丁寧に答えていく。

ここで大事なのは決して意地の悪いことを言わないことだ。子どもというのは言葉そのままの意味を捉えてしまうから。

それに、血の繋がりは感じないがライナスという子どもに私は少しの愛着を覚えた。

なんでだろう。そう考えきつと彼が美形だからだろうと結論付ける。悪女であった私が愛が何たるかを語るのは、なんだかとても不自然な気がした。

「姉上は僕がいて、嬉しい？」

「ええ、とても。」

出来るだけ子どもを安心させるように笑うとライナスは違う意味で涙を流し始める。

「…あ、あねっえええ！！ずっとあいたかったああああ！」

喚くように泣き始めたライナスの頭を私はゆっくりと撫で続けた。
美しき姉弟愛に感動する侍女の隣で、冷や汗をかいているフィリッ
プを横目で見ながら。

07 悪女と弟（後書き）

評価、感想、お気に入り登録本当にありがとうございます。

08 悪女が交渉する

「ルワーナ帝国に行くのって最初は僕だったんです。」

父上と母上は知らないけれど。

ライナスはフィリップのほうを盗み見して、私の耳元でそう言う。

「どうしよう？のために誰か行かなくちゃいけないで。」

「……最初から私じゃなかったの？」

「ううん。姉上は寝ていたから。」

だから、ごめんなさい。

そう言っただけで眉を八の字にするライナス。泣いたせいか腫れぼったくなっている目はうるうるすると潤んでいて、愛らしさを一層際立てている。

子どもながらに罪悪感を覚えていたのだろう、その肩は小さく震えていた。ライナスに最初に言われた言葉の意味が繋がる。恨んでいるのかと問われたのはこのことがあったからか。とはいっても、ライナスに怒りは湧かなかつた。

「貴方が行くことにならなくて、よかつたわ。」

何が最善の言葉かを考えて、ライナスにだけ聞こえるように呟く。わざわざ嫌われるようなことはしたくない、メリットもないし。や

けに感情が籠った声に私は内心で驚いた。

その言葉に頬を緩ませたライナスを撫でる、周りの目がさつきからやけに生暖かいのも計算である。もう一度言うが、計算である。

「ライナス様、そろそろ魔法学を学ぶ時間ですわ。」

侍女の中の一人がライナスに声をかけた。それにライナスはハツしたように顔を上げて「姉上、またお話できますか？」と慌てて私と目を合わせる。真つ直ぐな視線に「ええ。」と微笑んだ。

安心したような表情をしたライナスは侍女から魔法学とやらに使う教材を受け取った後、早足で部屋から出て行く。

「……アリシア様。」

声の主はフィリップだった。

「フィリップ、聞きたいことがあるの。」

そう言ってニコニコとした笑みを浮かべれば、フィリップは苦い顔をして侍女達を部屋の外へと追い出す。部屋を出るとき心配そうにこちらを見たミランダに「大丈夫」と口パクをし、フィリップを向き合っ。

「さて、どういふことか説明してくれるかしら？」

私の弟にあることないこと吹き込んだのは貴方でしょう、と目を細めるとフィリップは苦い顔のまま頷いた。

外に人がいるといつても、男と女が二人きりになれば良い雰囲気になつてもいいと思うのだが、生憎目の前の男とそんな甘っちょろいことをする気はなかった。そんな趣味は私にない。この状況を例えるなら蛇とそれに睨まれた蛙である。勿論私が蛇だ。

いつまでもだんまりを続ける家臣に私はわざとらしくため息を吐く。

「どうせライナスとの会話、聞こえていたんでしょ。知られてま
ずいことだったかしら？」

「……人質としてルワーナ帝国に行くと聞けば、不安になられるで
しょうから。」

「違うわね。」

語尾をもによもと誤魔化すフィリップの声を私の声で掻き消した。強い口調のそれにフィリップは驚いたようにこちらを見る。少しばかり素が出てしまったようだ。いけないいけない。

「私を人質に選んだのはフィリップ、貴方だと思ふの。」

「……何故そう思われるのですか？」

「じゃ無ければライナスが声を潜めるとは思わないわ。」

貴方の方を見てね、とそう付け足せばお手上げだとも言うようにフィリップは自身の手で顔半分を覆う。

「まさかアリシア様が別世界でこんなに立派に育ちになられてるとは思いませんでしたよ。」ため息を吐き出すように呟かれた言葉に私は深く笑みを浮かべ「お褒めいただき、ありがとうございます。」と返した。

「結婚というのは嘘？」

「いえ、アリシア様の名を挙げたら、あちら側が是非にと。」
「なるほどね。」

政略結婚は本当のことらしい。

一番気になるところだったのだが、それが本当ならばその背景など私の知ったことではない。

「王達は貴女に王位を譲る気でいました、ですが……」

「身体はアリシアだとしても中身はどこぞの誰かわからないものねえ。」

「……根本的にはアリシア様だというのは存じております、」
「言い訳はいいわ、私もそう思うし。」

私は聞き飽きたとでもいうように、窓から入って来る日の光に当たって青色に光る髪の毛を弄ぶ。

フィリップは私があまりにも何気なしに言うので大きく目を見開いてこちらを凝視していた。

「お咎めになられないのですか？」

「何か勘違いしているようだけど、私、王とか、あまり興味ないの。」

建前で話す必要はないだろう。そう思った私の口からはすらすらと言葉が出て行く。

「こつちの世界の人間がどうだかは知らないけどね、いきなりこつちに来て王になれって言われたほうが嫌だわ。国のことを考えればフィリップの考えの方が正しいことくらい分かるし、別にそれを咎めようとは思わない。」

私の言葉にフィリップがホツとするのが分かった。

今は本音である。執政や外交、そんな問題を今まで一般人として生きてきた私が出るわけがない。まあどろどろした世界なら生きていける気はするけど。

けれどこれを使わないというのは勿体無い。

「その代わり、」

そう私は言葉を区切る。

「私のお願い、聞いてくれるわね？」

王達でさえ知らない情報を知られて困るのはフィリップだ。独断でアリシアを差し出すことを決めてしまったということなのだから。やめさせられる、というのは流石にないだろうが、長い間王の目が光るに違いない。

嫌な微笑みを向ける私にフィリップは諦めたように「仰せのままに。」と頭を下げた。

08 悪女が交渉する（後書き）

次回別視点になります。

読んでくださった方ありがとうございました。
何かありましたら気軽に指摘お願いします。

09 ある帝国の青年は

騎士団のために王城の中に設けられた鍛錬場は、それなりの広さがあるにも関わらず熱気で満ちていた。キン、と耳を劈く金属音、それに合わせて誰かが喝を入れるように叫ぶ。

エドウィンは比較的人気の少ない鍛錬場の壁にもたれ掛かっていた。

「副団長。」

「……ラルフか。」

突然かけられた声にエドウィンはハッ、と勢い良く顔を上げるがその姿を確認し安心するように息を吐く。ラルフと呼ばれた青年はエドウィンのその反応にわざとらしく肩を竦めた。短くまばらに切られた黒髪に、色の濃い灰色の瞳をした彼はエドウィンの良い兄貴分でもある。

「お疲れのようで、副団長。」

「誰も話を聞いてないだろ。いつものように話してくれないかい？」

「そういうと思ったよ、エド。」

両手を顔の両隣でヒラヒラとさせ仕方ない、とでもいうように笑うラルフにエドウィンは苦笑いにも似た笑みを浮かべた。

副団長であるエドウィンの右腕と言っても過言ではないラルフが鍛錬場で話しかけてくるのは珍しい。

王族という権力を振りかざすことなく、副団長の座に上り詰めたエドウィンの努力は並外れたもので、鍛錬も他の人間の二倍、三倍もの量をこなしている。そのことを知っているラルフはエドウィンの邪魔をしないように鍛錬場で雑談をするのを極力避けていた。

「話しかけてくるなんて珍しいね。」とエドウィンが言えば、ラルフはムツと眉を寄せて「自分で気づいてないのか？」と返した。何のことも分からないエドウィンは首を傾げる。その様子にラルフは呆れたようにため息を吐いた。

「鍛錬場に来てるのに鍛錬をしないエドなんて初めて見たぞ、俺は。」

「……そんなに時間が経ってた？」

「おうとも。」

頷くラルフにエドウィンはやってしまった、とでも言うように自分の額に手を当てる。

自分では気づいてなかったが、部下でもあり友人でもあるラルフが声をかけてくるほど、深く考え込んでいたらしい。今までそんなことをしたことがなかったので、改めて自分自身がどれだけ悩んでいるかを認識する。

「で、何に悩んでるんだ？」

「……くだらないことだよ。」

「くだらないかどうかは俺が判断するさ、なんだよ？」

引き下がる気がないらしい、はぐらかそうとするエドウィンの言葉に食いつくラルフ。

これは言うまでしつこく言われそうだ。内心面倒だと思ったエドウィンは、好奇心混じりの心配の目を向けてくるラルフに自分の悩みを打ち明けることにした。

「今度、アリシア王女と顔合わせをするんだけど……」

エドウィンの言葉の途中でラルフは「え。」と短く声を出す。

「俺、聞いてないぞ。」

「断ろうと思ってたから、言わなくていいかと思って。」

そう言っただけを向くエドウィンにラルフは口元をぴくぴくさせた。

エドウィンの側近でもあるラルフは彼の遠出の時、必ず着いていくことになっている。それなのにラルフにその情報が回ってきていない。そのことをエドウィンに言くと「全部俺が処理してたからな。」と当たり前のように言い放った。

「……それは、顔合わせに行ったほうがいいんじゃないか？」

エドウィン本人に任せたらこうなると分かっていたらどうに、と書類を回しただろう王を思い浮かべ、ラルフは頭痛がしてきたような気がした。全部、といっているところからこの話は何回かあったのだろうと想像出来る。

「それともあれか。幽霊王女と名高いアリシア王女が怖いとか。」

「まさか。幽霊ってのはただの噂だろ？」

「まあ、そうだけござ。」

現実逃避でもしてるのかと思って。
からかうラルフにエドウィンは「そんなはずないだろ。」と冷たく
言い放ちながらも顔は笑っていた。

「本当は存在しないとまで言われるぐらいだ、とりあえず生きてる
ことぐらい確認しておいたほうがいいんじゃないか。」

一度も公に顔を出したことの無いアリシア王女は、他国にとって謎
に包まれた人物である。

そのため、様々な噂が飛び交っていた。魔女みたいな容姿をしてい
るから外に出ることが出来ないとか、王が溺愛しているため表に
出さないだとか、更にはクラーク国がでっ上げた嘘だという意見
も出るほどだ。

「アリシア王女が居るのは確認している。」

「……じゃあ余計会いにいったらどうだ？」

不思議だ、という顔をしたラルフにエドウィンは少し言つのを躊躇
う。が、観念したようにその口を開いた。

「別に会ったところで、結婚するのは変わらないと思って。」

エドウィンの悪気のない言葉にラルフは口から出るため息を抑える

ことが出来なかった。

どこでこいつは捻くれたんだろう、ラルフのその感想は声になる」とはなかったが。

「国のためだけに結婚するんじゃないんだぞ。」

「国のためだけだよ。」

吐き捨てるエドウィン。ラルフの眉間に皺が寄る。

「少しは自分のことも考えたらどうだ？」

ラルフの低い声にエドウィンは笑った。

「それ、兄さんにも言われたよ。」

10 悪女は出会う

第二皇子との顔合わせの日、私は上機嫌であった。決して夫となるその人と会うからではないけれど。

「まあ、綺麗な白粉ですわね。」

私に化粧を施してくれるミランダが嬉しそうな声をあげた。ファンデーシヨンと呼んでいたものはここでは白粉というらしい。その声には深く微笑む。

ドレスサーには取り寄せた（というか作らせた）化粧品がズラリ、と並んでいる。

悪女だったあの頃はこれを買うために必死だったのに、この生活では頼めば物が手に入る。まあ、少し脅した節はあるけれど。

中世ヨーロッパのような風習があるクラーク国では、これまた中世ヨーロッパ風の化粧が一般的であった。

何かで見たことがあるのだが、ファンデーシヨンとして使っていた白粉には昔、白鉛や水銀が含まれていたらしい。

まさか、と思ってドライフルーツに使われていた酸化防止剤を少し混ぜてみれば案の定、黒く変色した。

これでも化粧はプロ並みに極めた方だ。大体の知識は頭の中に残っている。

何回か使うだけならまあ問題はないだろうが、毎日化粧したい私に

とってはこれは死活問題である。

今までは城の人間としか会わなかったし、やせこけた顔を戻していた最中だったので化粧をする必要がなかったのだが、これからは私のプライドが許さない。

乳液はあったのでそれを元に白粉を作らせた。勿論、フィリップに頼んで。

魔法が発達しているからかは分からないが、案外早く出来たらしい。そのあたりは技術者でもなんでもないのでなんともいえないけれど。

「ええ、フィリップに頼んでいたの。」

「じゃあこの前フィリップ様が仰っていた頼みごとって…」

「このことよ。」

私が頷くとミランダは納得したように「へえ…」と声を漏らした。その様子に後ろでドレスを持っていたマリーがわざとらしく咳払いをする。びくつ、と肩を揺らし、ミランダは慌てて私の仕度を始めた。

「アリシア様、あまり時間がありませんのよ。」

「でも皇子が来るのは夕方のはずでしょう？」

「お聞きになりませんでしたか？その予定は昼頃に変わりました。」

淡々とした口調のマリーに対して、私はその言葉に驚きの声をあげた。

「なんで？」

「なんでもご一行様が早くお着きになられたので、急遽変更を、と。」

「へえ、気合でも入っているのかしら。」

「……いえ、早く帰って執務の続きをしたいと仰っております。」
マリーが少しだけ言いづらそうにする。多分私の夫になるだろう人間の物言いだろうそれは、明らかに今日の顔合わせを疎んでいるようであった。私はため息を吐いて「なるほどね。」というしかない。

政略結婚の相手に気を使う必要もないということなのだろうか。
いや別にそれはいいんだけど。……贅沢させてもらえるのか不安になってきた。

後々の対応を考えていると、先方の言い草にショックを受けたのだと思われたのか、私たちの話を後ろで聞いていたミランダが「あまりお気になさらないほうがよろしいですよ。」と眉を八の字にさせる。その気遣いは嬉しいが、些かの外れである。

「あ！気分転換にお庭を散歩なされてはいかがでしょう？マリー様もそう思いませんか？」

「……ミランダ。まあ、いいでしょう。今ならライナス様もお庭で剣術の稽古をしてらっしゃる時間ですし。」

「ライナスが？」

弟の名前に反応するとミランダとマリーが同じタイミングで首を縦に振った。

ライナスとは同じ城の中に住んでいるといってもあまり会える時間がない。それは弟に限ったことではなく、王である両親にも言える

のだが私的にはライナスに会えるほうが嬉しい。

気分転換は必要なかったが、ライナスに会えるなら、と私は庭に向かった。

「来てみたものの、……ライナス何処にいるんだろ。」

色とりどりの花で埋め尽くされた庭は思った以上に広い。

姉弟の面会に水を差すわけにはいかないから、とミランダとマリイに言われたので一人で来たのだが。やっぱり連れてきたらよかったか、と一人ごちる。

まあ悩んでも仕方ない、歩いていけばそのうち会うだろう。

そう思っただけは歩みを進めた。

庭師でもいるのだろう綺麗に整えられた花々は私が元居た世界にあるものと同じもののように思う。

ファンタジーめいたこの世界である世界との共通点を見つけるのは稀だ。

「かと言って戻りたいわけではないけどね。」

そう言って空を見上げた。あの世界と同じ、綺麗な水色が一面に広がっている。

戻りたい、とは思わない。

今の生活のほうが好きだし、何よりお金のことを気にしないでいいし。好きに買い物を出来ない代わりに望めば殆どのものが手に入る。まさしく御伽噺に見たお姫様みたいな生活だ。いや、どちらかといえば悪い女王の生活か。誰もが一度は夢見たような生活を送っている自覚はある。

けれど、何か足りないような気がした。

私の家族は私のことを心配しているだろうか。家族と言ってもらくでもない本当の両親はとっくに死んだから、血の繋がりは無いのだけだ。

きつと忘れてるんだろう。多分私が誑かしていた男達のほうが私のことを覚えていてくれるはずである。

どうしようもない人生だ、と私はため息と吐いた。

「……………ん？」

耳を澄ますと、何処からか掛け声のような声が聞こえてくる。声の高さから言って子ども、多分ライナスの声だ。

それを頼りに道を進んでいくと大きな広間に出る。コツ、とヒールの音を立てると、その音に気づいたのか、広間で剣を振り回していたライナスがパツとこつちを見て「姉上！」と走ってくる。

「ライナス！」

「姉上、どうしたんですか？こんなとこに……」

「貴方が剣の稽古をしてるって聞いて…駄目だったかしら？」
「そんな！嬉しいです！！」

ライナスのはきはきとした声には笑みが零れるのを抑えることが出来なかった。

「……誰ですか？」

見知らぬ声に顔を上げる。

「……貴方こそ、誰？」

視線の先には、赤い甲冑を纏った見たことの無い青年が居た。

10 悪女は出会う(後書き)

化粧品の話は適当なので、間違っていたら教えてくださいと嬉しいです。

少し書き直しました。

11 悪女は探る

暫くの間、私とその青年は無言のまま突っ立っていたが、彼の手に握られた剣が日の光に当たってきらめくのが目に入り、咄嗟にライナスを抱きしめるように引き寄せる。

私にも母性本能というものが備わっていたことに吃驚だ。子どもが出来ていたらあの生活ともおさらばしていたのかもしれない。

しかし一人考え込む暇はない。目の前には凶器を持った人間がいるのだから。

ライナスを私の背後に押し込むように体の向きを変える。

私の行動に何か様子を見せたのは青年ではなく、私の腕の中にいるライナスのほうであった。

「あ、姉上！大丈夫です！その方は剣をおしえてくれていただけです！」

ライナスが慌てて叫んだ言葉にぴたり、と私は止まる。剣を教えてくださいただけとか。私の勘違いだったのか。

「……その、誤解させて、申し訳ありません。」

「……いえこちらこそ、誤解して、すいませんでした……。」

気まずそうに頭を下げた青年に対して私はなんともいえない複雑な表情で頭を下げ返した。

ライナスにまわしていた手を緩め、まじまじで青年を見る。

深い緑色をしたその瞳は彼の着ている赤い甲冑と対照的でその整った顔によく映える。

フィリップやライナスより少し彫りの浅い顔（とは言っても私とは比べ物にならないほど深いけど）はハーフを思わせた。こっちの人数による顔の違いはよく分からないが、そういうのを除いてもイケメンの部類に入るだろう。

「…ええと、どなたでしょうか？」

あちら側から見て顔がいい角度で映るように、少し微笑みながら首を傾げた。

この青年が誰であれ、媚を売っておいて損になることはないだろう。やっぱり、この癖は抜けないらしい。心の中で苦笑する。

「失礼致しました。ルワーナ帝国第二皇子、エドウィン様のお付きで来たものです。」

そう言って跪いた青年。すらすらとその言葉が出てくるということは何度も言っているからだろうか。

エドウィンというのは私の夫になる予定の男の名前だったような気がする。

見たところ、青年は20超えたか超えてないくらい。アリシアにな

った私と同じくらいだ。

この歳でこんな重要な役職に就けるといことは相当な実力の持ち主か、はたまたエドウィンという男にそういう趣味があるか、だ。

……嫌な想像をしてしまった。

「そう…エドウィン、…様の。」

「ええ。」

危うく敬称を付け忘れてしまうところだった。気にせず頷いた青年に私が自己紹介をしようとすると「アリシア様、ですか？」と窺うように言われる。

「……なんで分かったのかしら？」

「ライナス様が、姉上、と。」

「ああ、なるほど。」

頭はいいらしい。まあ、お付きになるくらいだから当たり前か。お付きというのが本当かどうかは知らないけれど。

「姉上。」

唐突に声をあげたライナスに私は目を向ける。

「ぼくはそろそろフィリップのところに行ってきます。」

「え？」

私の声は聞こえていないのか、ライナスは言葉を続けた。

「色々話すことも、あるだろうし……！」

「ら、ライナス……？」

「姉上、また話しましょうね！」

おにいさまもありがとうございました！

早口でそう言ったライナスは私と青年にペコリと頭を下げて走っていく。ライナスに会いに来ただけど、というには遅かったようで、ライナスは花で囲まれた道を早々と走り抜けていった。

残ったのは私と青年の二人だけ。

このまま立ち去るのもアレだし、夫となる相手に直接聞ける話ではないことでも聞いておこうと私は口を開いた。

「ねえ、ルワーナ帝国ってどんなところ？」

「……………は？」

青年は間抜けな声を出した。目を見開いてこちらを見ている、そんなに驚かれるようなことを言っただろうか。まあ今から嫁ぐ国のことを知らないって言っているようなものだから呆れたのかもしれない。

「ごめんなさい、世間知らずで。」そう眉を八の字にしながら言うと青年は顔の前で両手を振る。

「……ああ、いや、てっきり、エドウィン……様のことをお聞きになるのかと思って。」

そういうことか、私は声に出さず呟く。

「エドウィン様がどんなお方でも私は嫁ぐわ。それが私と、そちらの国のためになるのなら。」

今更夫となる人間の話など聞いてもなんの意味もなさない。
私は自分のためになるのなら、どんな人間に嫁いでもいいと思っ
ているからだ。

少し本心を交えながらあちらに良いように聞こえるように言う。見
たこともない人間を好きとかいうより、よほど健全で好印象だろう。
すると目の前の青年は瞬きを何回かして「そう、ですよね」と語尾
を大きくした。なぜ、そんなに目を輝かせているんだ。

「アリスア様がそう言うてくださる方でよかった。」

そう言うて微笑んだ青年。どういうことだろうか。

美形の笑顔は確かに眼福だが、言葉の意味が不透明だとどんな人間
でも不審に思ってしまう。

一歩二歩後ずさりをしながら「私、仕度あるのでこれで。」と冷静
を装って言う。「あ、」と青年が言葉を吐いた。

「アリスア様、貴重なお時間有難うございました。」

「いえ、こちらこそ、貴方と知り合えてよかったですわ。」

そうやって微笑んだ笑みはとても綺麗だった。本当、顔がいいって得だ。

内心でそう思いながら私は会釈をしてその場を立ち去る。

結局ルワーナ帝国のこと、聞けなかった。

けれど収穫はあった。青年が着ていた甲冑はかなり値が張るものであろう、お付きかどうか分からないが、相当金がかかっている。まあクラーク国より裕福なのは間違いない。夫となる男にさり気なく聞くことにしよう。

その後ろで青年が薄く笑みを浮かべたのに、私が気づくことはなかった。

12 女は気づく

「は、結局会ってはないのですか？」

フィリップの気の抜けた声に私は首を縦に振った。

「ええ、あちら側の……ラルフさん？に王は急ぎの用事で帰ったと言われたわ。」

「あの側近の方ですか……。」

そうそう、そう言ってた気がする。灰色の髪の毛が印象的なこれまた美形の男だった。

やっと顔合わせを引き受けてくれたのに、と肩を落としたフィリップ。

その様子には私はあらあら、と他人事のようにマリーが淹れてくれた紅茶に口をつけた。

すぐ立ち直ったフィリップは大きなため息をこちらに寄こす。お茶がまずくなるからやめてほしい。

「……アリシア様は何か思うことはないのですか？」

「思うことって？」

「貴女様のことだから王に会って誑しこむくらい考えてそうだと……。」

フィリップが半目でこちらを見ながら呟いた言葉に今度こそフィリップに目を向ける。

ミランダや他の侍女が居るときに言っていたら本気で怒鳴るだろうけど、幸いなことにここにはマリーしか居ない。（彼女は私の本性

に薄々気づいているようだったので取り繕うことはやめた。」

考えていたことだから訂正する必要もない、「そのつもりだったけど」と言葉を吐く。

「他に情報源手に入れたから。」

事も無げに私が言い放つとフィリップは分からないと言った風に眉間に皺を寄せた。パタパタ、と遠くから響いてくる足音に私は顔を上げる。軽い音のそれはきつと私の思い描いた人物で合っているだろう。私の部屋まで走ってくる人物なんてそう多くはない。ドアの叩く音が響く。

「姉上！」

「ライナス、今日もいらっしやっただのかしら？」

「はい！先ほどまでお話をさせていただいております！」

嬉しそうな笑みを浮かべながら入ってきたライナス。その勢いのまま立ち上がった私のお腹当たりにダイブしてくる。少し衝撃の強いそれを笑顔で受け止めながらライナスと顔を合わせた。

「そう、もういいの？」

「こんどは剣の練習にもつき合ってくれてやくそくしたので！」

なるほど、よっぽどライナスは彼に懐いているらしい。

「あ、あの…アリシア様？」

「ああ。どうしたのフィリップ？」

「その……アリシア様とライナス様は何方の話をしてらっしゃるの

でしょうか…。」

そういえば言っただけでなかったわね、とさも今気づきました、とでも言うように私は声を上げる。わざと言っていなかったんだけどね、と心の中で付け足して。

「ルワーナ帝国の方よ。」

それだけ言い残して私はライナスの手を引っ張り、部屋を出て行くとする。

後ろでフィリップの慌てる声が聞こえた。

「それはどういう…？あ、アリシア様！！」

その声を最後に扉は音を立てて閉まった。

「ごめんなさい、待った？」

私がその声をかけた先にはいつかの私の話し相手になった青年が居た。

彼は私の呼びかけににっこりと微笑み、腰を下ろしていた椅子から立ち上がる。

「いいえ、大丈夫ですよ。」

「おにいさま！」

「アリシア様を連れてきてくれてありがとう、ライナス。」

そう言つて私の隣に居たライナスの頭を撫でる青年。ライナスもそれに甘んじている。私が知らない間にかなり仲良くなっていたらしい。

「今日は何の話をしましたようか？」

「ルワーナ帝国のことはもう随分と聞いた気がするわ。」

首を傾げた青年に私はそう言う。

彼がここに来るのは初めて会ったときを除いてももう3回以上になる。

未来の旦那のエドウィンが来ているわけでもないのに、彼は一人でここ、クラーク国に訪れるのだ。

最初は私も警戒していたがそれなりの地位の人であることは間違いない。

それにライナスが彼にベツタリだったのだ。

子どもは素直である。邪険に扱わないところを見ると性格も見るに耐えない、というわけでもないらしい。

そんなわけで私と彼の奇妙な交流は続いていた。

「もうそんなに話しましたっけ？」

「そうよ、あなた、結構な頻度で来て下さるから。」

私が茶化してそういうと、自覚が無かったのか青年はぼかんとした顔を浮かべ、「…そうでしたっけ。」と頬をかいた。クスリ、と笑みが零れる。

「ああ、ええと、何の話にしましょうか。ルワーナのことはい言尽くしたみたいだし…。」

それを誤魔化すように少し大きめに発せられた声。

私は少し考えて、そういえば彼のことを全然知らないことに気づいた。必要なかつし。

けれど、なぜか、うん、なぜか気になったのだ。

「そうね…、貴方のことが聞きたいわ。」

青年は「えっ」と短く声を発して沈黙した。

青年の隣にいたライナスが不思議そうに彼を見上げている。私も同じように彼を見た。

「私のこと、ですか…?」

「ええ…。」

何かを渋るように顔を俯かせる青年。そんなに言いがたいことなのか。いつまでも唸るような声をあげる彼に、埒が明かないな、と「嫌なら言わなくていいわ。」と言おうとした。

「いやならいわなくても、」
「嫌なわけではないです!!」

彼の声にライナスが「わっ」と声をあげる。私も肩を跳ねさせた。

「あ、いや、その、」

「……大丈夫？」

「いえ……大丈夫です。」

どうしたんだろうか。暗い声を出す青年。そして、彼はしどろもどろになるのを抑えながらその口を開く。

「その……アリスア様はエドウィン様と結婚なさるんですよね？」

「……ええ、そうよ。」

真剣な顔でこちらを見た青年。

少しだけ、心臓がビクリと跳ねたような気がした。

「それは…国のために、ですよね。」

どこかで聞いたような言葉に私はなんでそんなことを問われているのか分からなかった。

これはそうだ、初めて会ったときに聞かれた言葉だったか。

けれど秘めているものはあの時とは違うような感じがして、私は目を細める。

「……そうね。国のために、私はルワーナに行くわ。」

この前と同じように私がそういうと、青年は少しだけ目を見開いたあと、すぐに顔を笑顔に戻す。

けれど今まで色んな男の顔を見てきた私が見逃すはずがなかった。

「すみません、今日は帰らせていただきますね。」

「えっ、おにいさま！行ってしまおうのですか？」

「……ライナス。」

青年を引きとめようと裾のところを引つ張るライナスを静かな声で止める。ライナスは名残惜しそうに彼の顔を見てからその手を離れた。

そのまま青年は私達に礼だけをして、その場を去っていく。

「おにいさま、どうしたんでしょうね……。」

「……さあ、どうしたのかしら。」

本当は分かっている。そして彼の正体も分かった。

私はライナスには気づかれないように、自分の下唇を噛む。

今まで気づけなかったなんて、不覚だ。

こちらに来てから、悪女としての勘が鈍っているような気がする。いや、鈍っていたから気づかなかったのだろう。本当、いやになる。もし鈍っていなかったらこんな思いもしなくて済んだのに。

「エドウィン…ね。」

私の眩きは酷く小さく、自分の耳にも届かなかった。

12 女は気づく(後書き)

展開はやすぎたかもしれない…

お気に入り登録評価ありがとうございます！

何かありましたらお気軽にお教えください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067y/>

ある悪女の純愛劇

2012年1月2日05時45分発行